装丁

西日本の個性的な書店・版元巡り

桂川　潤
装丁家

出版社から古書・新刊書店まで巻き込んだ福岡の本のお祭り「ブックオカ」。その立役者・大井実さん（ブックスキューブリック）と田村元彦さん（西南学院大教員）が、拙著『本は物である』の刊行記念にトークイベントとブックデザイン展を開催して下さったのが二〇一一年一月。セレクトショップ的な本屋の先駆けとなったブックスキューブリックを筆頭に、博多はいま大小の書店が軒を連ねる「本の街」として注目されている。四月一九日、「これから、本の世界はもっともっと面白くなる！」と題された大井さんと三島邦宏・ミシマ社代表の対談がキューブリック箱崎店で開催されると聞き、この機会に西日本の個性的な書店・版元を巡ることにした。

カフェ、ギャラリー、イベントスペースに加えてパン工房まで備えたブックスキューブリック箱崎店は、博多の本好きが集う魅力的なコミュニケーションの場となっている。ミシマ社創立一〇周年を迎えた三島さんは、同社の実験的な本づくりについて「もう動かないと思った瞬間に動けなくなってしまう。居ついて（居つく＝両脚に重心が同時にかかり、動きが止まること）はダメ。紙の本の持っている〝強い現実〟が大事です」と強調。キューブリック創立一五周年を迎える大井さんも「三島さんと同じく、〝どうしても本をやりたい〟一心で正面突破してきたが、存続できる規模、身の丈は常に意識してきた。紙の本の持っている力、手応えはすごい。好きだし、伝わるし、メッセージ性がある」と応答した。

買い切りを前提に、卸値を六掛けにして書店のマージンを増やしたミシマ社の「コーヒーと一冊」シリーズについて、大井さんは「買い切りはやはり書店にとってリスク。陳列した本の何冊かは傷むので負担が大きいし、内容によっては〝様子見〟もしたい。六割五分掛けにして、多少の返品はOKというわけにはいかないか」と、両者が「まるで商談会」と苦笑する切り結びも見られた。

翌四月二〇日の訪問先は、山口県周防大島で質実な出版活動のかたわらミカン農家と写真館を兼業する柳原一徳さんの「みずのわ出版」。柳原さんはミカンの苗を植える作業の最中で、筆者もお手伝いした。六本の苗と聞いて高をくくっていたら午後いっぱいかかるなかなかの労働。風の向きや周囲の植生、土地の性格を見定め、根を活着させるために大量の水を少しずつ注ぎ、隙がないよう棒で突いていく。最後にマルチ（保温・保湿・除草のための被覆）を張って完了だが、苗はまだ三四本残っているとか。農作業の厳しさを実感した。とはいえ夕食のビールの美味しかったこと。柳原さん自慢の手料理が次々と並ぶ。結局のところ本の話は滞在中ほとんど出なかったが、晴耕雨読の柳原さんその人が、「身体としての書物」を印象づけた。

最終日の四月二一日は、いま話題の京都の書店巡り。恵文社一乗寺店は、衣服や生活雑貨を扱う生活館を併設したじつに美しい書店だ。装丁した本を見つける度にちょっと嬉しくなる。古書や雑貨、陶磁器も扱う「ホホホ座」、ミシマ社京都オフィス内の「ミシマ社の本屋さん」、恵文社一乗寺店を今の姿に育てあげた元店長・堀部篤史さんが開いた「誠光社」、一見ふつうの本屋ながら、個性的な品揃えとバーゲンブックの質量に圧倒される「三月書房」…。京都の本屋はなぜ個性的で面白いのか、作家のいしいしんじさんは「京都の人が本を望んでいて、本屋を大事にしているから」と言う。出立寸前、注目のブックデザイナー・矢萩多聞さんにもお会いでき、三日間の忙しなくも充実した旅を終えた。